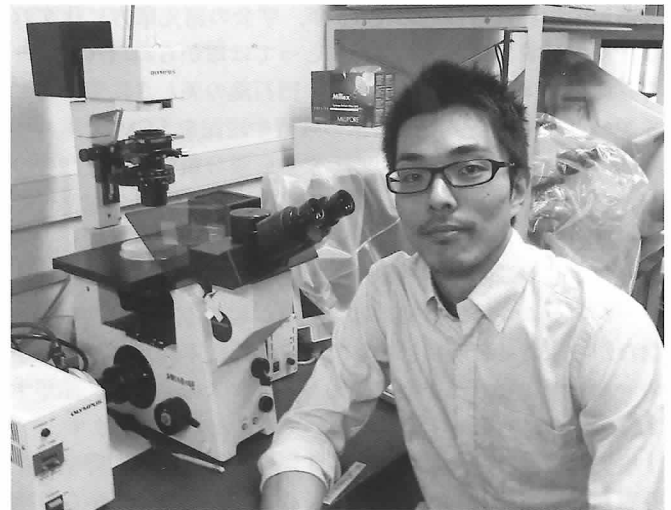


阿部真比古：藻類学会という器

日本藻類学会創立 60 周年、おめでとうございます。私が日本藻類学会に入会して 10 年が経ちました。創立 60 周年という節目にこのようにペンを執る機会を頂き、お声をかけて頂いた寺田先生に感謝すると同時に、時間の流れを感じております。つい先ほど、10 年前の 50 周年記念特集を久し振りに読み返しました。大学院の時に確実に読んだことがある（当然ですが・・・）。寄稿されている先生方も錚々たる面々で、内容が非常に濃い。さらに 10 年前の 40 周年記念特集には、「おお!!」。これが派々と受け継がれてきた藻類学会の歴史というものか。

私が藻類に興味を持つようになったのは、大学 2 年の時です。水産植物学実験という科目の中でアカモクの幼胚を培養し、形態の変化を毎週スケッチすることが非常に楽しかったのです。藻類学会に入会した大学院時代は、藻類学という冠を持った研究室にしながら、ずっと海草アマモの生理生態学的な研究をしておりました。研究成果をどのような学会で発表して良いのか解らず、指導教員の前川先生に尋ねたのが始まりです。それ以来、学会と言えば藻類学会となりました。学会では、アマモ群落の季節変化、群落の構造解析、種子の落下方向と発芽の関係、光合成及び呼吸測定による実生の光要求量や生育限界温度など多くの発表をさせて頂きました。その都度、多くの先生方からご意見を頂き、研究をブラッシュアップすることができました。これは藻類学会には大学関係者が多いということと関連するかもしれませんが、人材育成という観点から大学院生やポスドクにアドバイスされ、議論しやすい雰囲気醸成しているからだと感じています。このような雰囲気は我々が引き継いでいかなければならないと思っております。

現在、私は、アマノリ類を中心として細胞培養や分子生物学的手法を用いた有用海藻類の探索と増養殖に関する研究を行っています。今もボンベを背負って海に潜り、大型海藻の生理生態学的な研究をしていますが、胴長を着る機会の方が多くなりました。水産学における藻類の位置付けは、ノリ、ワカメ、ヒジキなどの増養殖と、安定的な水産資源の供給を目指した藻場の形成と維持であろうと思います。日本の海面養殖において、ノリの生産量は 80～100 億枚（1 枚の大きさはタテ 21cm×ヨコ 19cm、重量約 3g）、生産額 1000 億円の大きな産業です。しかしながら、外国産の輸入増大、価格の低迷、海域の環境変動による漁期の短縮や色落ちの頻発など海苔養殖産業は逼迫した状態にあります。良いノリが生産できなくなってきたため、生産者の数も年々減少しています。そこで、多くのノリ研究者は、“色落ちに強い”、“高温に強い”など様々な環境に耐性を持つ特長のあるノリを全国各地で必死に探しています。私も県内に生育するノリを採集し、DNA マーカーを利用した種判別と保存株の確立を行っています。また、フィールド調査において個体や個体群などのレベルで生態学的な基礎研究も行っています。フィールド調査と室内実験を組み合わせることで、天然資源の維持・管理、有用海藻類の



増養殖手法の開発と改善に向かうのだと思っています。いずれにしても、早い段階で特長あるノリが見つければよいのですが・・・。

私はノリを含めた有用海藻類の探索において、それぞれの地域に生育している海藻を丹念に調べ、活用できそうな種を見出していくことが良いのではないかと感じています。海域に合うだけでなく、地域特有の海藻利用法が眠っている可能性も高いからです。山口県の瀬戸内海側には絶滅危惧種カイガラアマノリが生育しています。県内の一部の地域は、カイガラアマノリを「赤のり」という呼称で食材として利用してきました。風味も豊かで非常に甘みが強く美味しいことから、山口県はカイガラアマノリの増養殖技術を開発し、「紅きらら」という地域ブランドを作り上げました。今後の展開に向けて課題もあり、お手伝いさせて頂いておりますが、黒いノリが価値のある海苔業界で地域に生育する赤いノリに活路を見出し、地域振興に繋がったのです。サンプリングに出かけると、若いツルアラメが食べられていたり、アラメが棒状（商品名「棒巻カジメ」）になって売られていたり、まだまだ知らない地域利用種は本当に沢山あり、食文化と地域振興についても考える余地はあります。

最後に、20 年前から言われておりますが、藻類の生態学を行っている若い研究者はどれくらいいるのでしょうか。海に潜っている若い研究者はどれくらいいるのでしょうか。また、アマノリ類を対象としている若い研究者はどれくらいいるのでしょうか。フィールドからスタートして遺伝子や細胞を扱うようになって思うことは、分野は越えなくてはならないし、専門性のバランスが必要であるということです。藻類学会という器の中で、そのバランスはいかがでしょうか。私は藻類の生態やノリの研究者がもっと増えてほしいと思います。これは藻類研究の発展と日本の産業のために考えるべきことと思っておりますので、力を入れていきたいと考えています。

(独立行政法人水産大学校生物生産学科)